



音楽運動



日本音楽協議会 〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町3丁目10-15 富士ビル505号室 発行人 松本敏之
TEL 03-3221-1821 FAX 03-6369-3057 URL <http://nichionkyou.org> Email nichion@yomogi.or.jp

2022日音協セミナーと若い会員の交流会を開催します

第58回定期総会でご議論、ご決定いただいた通り、2022年日音協セミナーを創作コースとして開催します。

なお、日程については総会のご提案のときに検討中の案として申し上げたものよりも全体が1日遅れになりますので、ご注意お願いいたします。

同じ日程、近接の会場で開催される日音協若い会員の交流会（別途近日中にご要請します）と、一部分合同の力リキユラムとします。

ふるってご参加をよろしくお願いたします。

記

1、日時 2022年2月11日（金）13時～13日（日）12時20分まで

2、ところ

(1) 講座は学園坂スタジオ（東京都小平市学園東町1丁目7-41 3階）

新宿駅からJR中央線快速28分で国分寺駅↓西武多摩湖線に乗り換えて3分で一橋学園駅、下車↓北口から商店街を線路沿いに進み、スーパーMARKET SUの角を右折すべく、寿司屋「黒潮」のビル3F。（徒歩3分）

(2) 宿泊はビジネスホテル一茶別館を予定します。（東京都小平市学園東町1丁目8-1）参加者が多い場合は、近隣のホテルに宿泊いただく場合もあります。

3、内容

(1) 港大尋さん（第50回はたらくもの音楽祭ゲスト、2020年日音協セミナー講師）にご講演とワークショップの指導をいただきます。内容としてはこれから詰めることとなりますが、①10月19日に初演した「飛ぶ橋」の話、②「飛ぶ橋」で使ったアフリカやブラジルのリズムのこと、③小熊秀雄の長編叙事詩「飛ぶ橋」をどう読み解いてそれがどのように曲に反映したか、④日本語のリズムやイントネーション、⑤または童歌のリズム、などのことを港さんとやりとりしていきます。

(2) セミナー参加者の自作作品演奏と合評会を行います。自作作品演奏は、参加者の必須とするわけではありません。

(3) グループ創作を行い、2月13日に創作作品を披露していただきます。

(4) 参加にあたっての準備のお願い

① 港さんの講演の受講準備として、本年10月19日の「飛ぶ橋を歌う」コンサートの動画（YouTubeで次のURL、また、日音協ホームページからリンクがあります）、とくに『飛ぶ橋』（詩 小熊秀雄、台本・作曲 港大尋、YouTubeでは17分38秒から）をあらかじめ視聴ください。（※1）

② グループ創作の準備として、作りかけの詩や作りかけの曲（でき上がったものもOK）など、創作の手がかりを持ち寄ってください。

4、参加費と交通費一部負担など

(1) 参加費おひとり1850円（2泊、朝食、11日と12日の懇親交流会含む）のご負担をお願いいたします。ただし、全日程通して参加できない方のうち、懇親交流会を欠席する方、または宿泊しない方と1泊しおかない方には、相当の減額をします。

(2) 日音協セミナーに参加する日音協会員で各支部1人につき、往復交通費のうち13000円を超える分を日音協が負担します。

(3) 各日の昼食は各自でとって

ください。（1）「参加費」に昼食代は含まれません。飲食店やお弁当屋さんのご案内をします。

5 参加申込み

1月23日（日）を第1次締め切りとして、日音協事務所あて、別紙の参加申込書（省略）により申し込んでください。（※2）

6 その他

(1) 現時点では別紙のスケジュール（省略）を考えています。今後、講師や参加者との調整で変更する可能性があります。ご希望があればぜひお聞かせください。

(2) 感染症がまん延した場合には、延期または中止にする可能性があります。あらかじめご了承ください。

オミクロン株 要注意!!

※1 飛ぶ橋

<https://youtu.be/lxkkOHHAQtQ>

※2 日本音楽協議会

メール nichion@yomogi.or.jp
FAX 03-6369-3057

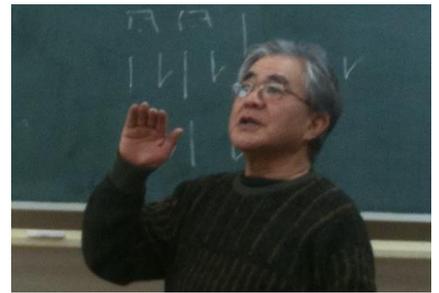
たかが歌されど歌

1997年4月19日付で『たかが歌されど歌—日音協三十年と私—』が発刊されました。今から25年近く前のものですが、はたらくものの音楽祭第三十回記念として、28人の方から原稿をいただきました。これからの運動の糧にしていきたいと思えます。

今号では、日音協セミナーの課題となる「飛び橋」の上演に情熱をかたむけた印牧真一郎さんを紹介します。

同時代の歌を

印牧真一郎



7、8年ぐらい前から参加している建築家関係の新年会「利き酒会」は、今年は長期熟成酒、つまり「古酒」がテーマだった。

20人ぐらいが26種類の古酒(3000ミリリットルびん)を廻し飲みする。小さな盃に半杯ぐらいつつ飲むのだが、これが可成りの大事業なのである。

私はこの日のために体調を整え、覚悟を決めて臨んだのだった。

酒を飲むのが目的であって、も、一つひとつにそれぞれの特徴があり、どうしても比較しながら味わうことになる。はじめのうちは小さな違いも利き分けられるのだが、そのうちにどうでもいいヤードとなってしまふ。それでも味わい分けようとするものだから、すっかり疲れてしまった。

その時ふと口をついて出たのが「はじめて聞く音楽を26曲、真剣に聴いたみたい」だった。

まさに大事業。昔、武満徹が主宰していた現代音楽展「ミュージック・トゥデイ」のことを思い出していた。

いきなり酒の話でどうも失礼しました。音楽の話に切り替えます。

(一)

次の2つは、私に強い印象を残している音楽シーンである。

1つは、熊本の養護学校の先生が、重度の障害をかかえている小学生と一緒に歌をうたっている録音テープだ。「道子ちゃん、歌うたお！」と呼びかけて芥川也寸志作曲の「ことりのうた」(小鳥はとつても歌がすき/母さん呼ぶのも歌で呼ぶ

／ピピピピ／チチチチ／ピチクリピィ)を先生がうたう。はじめは先生の歌しか聞かえない。途中にうなり声みたいなものが聞こえる。もう一度はじめから先生がうたう。今度は息づかいとかすかな笑い声のよつなものがまざる。そして3回目、おしまいの「ピィ」の時に、タイミンクはずれているのだが、嬉しそうなお子どもの「ピィ」がはつきり発せられ、歌が終わって一拍遅れでもう一度、はつきり「ピィ」と元気な歌がうたわれたのだ。

私が感動したのは先生の歌。輪郭のはつきりしたよく透る声で、実にいていねいに、心をこめて歌をとどけている。湿ったところのない芥川さんの明快な歌をえらんだこと、そして、とにかくうたう楽しさ、開放感を子どもにも伝えたいという熱意・誠意に満ちたうたごえが、子どもをゆり動かしたに違いない。

もう一つは自分のことで恐縮だが、オペラシアターこんにやく座のオペラ『変身』(セルルス・マシンの憂鬱(台本・演出 山元清多、作曲 林光))である。

原作はプラハ生まれのユダヤ人作家フランツ・カフカの『変身』。

ある朝起きると虫に変身してしまったセルルス・マシンの家

の収入源だった息子が虫になってしまい困惑する父・母、そして妹。

彼が何故虫になってしまったかの明確な表現はないが、会社の上司も両親も言葉が通じない。Kは現代社会からドロップアウトしてしまったのであろう、父親が投げた林檎が身体に喰い込み、それが腐って死んでしまう。

家族は嫌々、Kを肉親ではなく「虫」と認識し、それを捨て去り、新しい出発にむけ早春の街にでかける。

街は多くの人々で賑わいを見せていた。が、その彼ら全体を、より大きなヘナチの収容所を思わす鉄格子がとらえ、ラストシーンで次の歌がうたわれる。

まだ、生きる努力が
蝕まれていなかった
あの時代に
出発できていたら

歴史の誤ちを悔いるかのようには何回も何回もくり返される「出発できていたら」のリップラインを聴いているうちに、私は、本当に胸がはり裂けそうになってしまった。

この2つの音楽シーンを、私は生涯(もうそう長くはないが)忘れることができないであらう。

(2)

次は日音協・音楽祭について感じていることを箇条書きにしてみる。

1、労働者の集団というのは、ある面では特殊な一般からは遠く見える「世界」だが、今でも世の中の賃金の決定に春闘が一定の役割を果たしているように、確実に実態ある存在だ。労働しているという属性を捨てることは、若者が若さを失うのと同じように、大切な個性をなくすことになる。

2、しかしこのことを追求し、徹底することの困難があることも、まぎれもない現実である。その時一種の妥協として浮かび上がってくることは、自分自身にこだわり、それをいろいろな角度から見つめ、中途半端でない表現にまで到達することだ。それは決して妥協の産物などではなく、全く新しい展開を見せるだろう。

3、この小冊子のタイトルが「たかが歌、されど歌」となったことに大反対である。氷壁を登る時「たかがザイル、されどザイル」などと言う登山家がどこにいるか。音楽を職業にしていけない人たちは、もつすでに「たかが歌」なのだ。小熊秀雄が「残ってゐるものは喜びの歌ばかりだ」(鶯の歌)とうたったよう

(2面よりつづく)

に、もう残っているのは「されど歌」でしかないのだ。いかにも余裕あるふりをして、こんな陳腐な言葉が運動の中心に位置するなど、情けない。「たかが」とか「されど」とかの形容詞は不必要。私の歌をつたうーこれがいいのだ。

4、音楽祭が30回を迎えた。そのうち26回を共に担ったものとして、自戒の念をこめ、次の歌をおくる。

時は流れる 時は流れる
暮らしは昔を捨ててゆく
時は流れる 時は流れる
暮らしは明日を生みおとす

これは詩山岩田宏、曲山林光によるシユプレヒヒコール「みんなのゆびで字をかこう」の一節である。「私たちの空にはキノコ雲」という、原爆を落とされたながらその日その日を無為に過ごして来たことにたいする自責と告発の歌である。継続が力なのではなく、絶え間ない挑戦が力を生み出すのだ。

「構成(舞台)」という方法にもう一つ、シユプレヒヒコールという言葉を提起しておこう。

5、昨年の盛岡祭典は「仲間意識を確認する祭典であった」というのが私のまとめである。客席からの応援も多く、全国各地にうたう仲間が大せい居るの

だなあと、喜んだ感想を多く目にした。

しかし、音楽を交流し、発展させようという議論はきわめてすくなくあったように感じている。私が出演した「びっき」にしてもその透明な彼らの声は、その美しい生き方からきているという批評を読んだ。

これを逆さ読みすれば、上手でない演奏は生き方が汚いとなってしまうのだが、そんな訳はないに決まっている。

日音協を音楽を創り出す運動として位置づけるかどうか、ここが運動の分岐点であるだろう。

6、私が日音協時代に身に付けたものは、決して少なくないし現在こんにやく座で、オペラをつくっていく上で、大きな力となっている。本当に有難いことだ。

日音協運動をとりまく状況は、それだけ現実と深く切り結んでいるということだ。

私は、芸術の現状に波紋をおこすオペラ創造と座員の生活上、この双方を両立させる立場でこれからこんにやく座の活動を続けていく。

同じ時代を共に生きる(茨木のり子)みなさんの音楽と私の活動が、どこかで接点を持つにちがいないと確信している。

【印牧さんは、20017年4月19日に逝去(享年83歳)】

飛び橋(第1稿)要旨

※変更があり、決定稿とは違いますが、YouTube視聴の参考にしてください。

(ソング1)

冬が襲ってきた
他人に不意に頬を打たれたみたいに
冬が襲ってきた
他人に不意に頬を打たれたみたいに

しばらくは自然も人間も佇んでいた
佇むしかなかった物語

冬の到来を風が歌う
冬の到来を風が語る
そのとき急に空が低くなり
すべてが静まりかえる

海から 周囲の山陰から
数千の生き物が近づくと
ざわざわ ざわざわ ざわざわ

これらの生き物たちは、
不意に叫びをあげ、
村の上に倒れかかった、
人々ははっと思つと、
もうこれらの群れの姿はいない
人々はホッと長い長い溜息して
たがいに顔を見合わせる。

しばらくは自然も人間も佇んでいた
佇むしかなかった物語

冬が襲ってきた
他人に不意に頬を打たれたみたいに

A(セリフと語り) ※かなり違いがあります。

「こんど何々村に王子の製紙工場ができるよさ」

「ぢや行くべ、こんな村さ、へばりついてても何にもならんぞよ、」
「そうだ、そだ、出かけべ、何か仕事あるべよ」

「ああ、あるとも、角材出してもな
んででもな、うんと越年仕事に儲けてくるべ」

「国境さ、兵隊さん越年するとさ」
「それだば、でかけて軍夫にでも雇われべいか」
「そつするべ」

小屋から橋を引き出して、馬の首の鈴をチャンリン、チャンリンと鳴らしながら、橋の一隊は海辺に数十里の雪の路を国境の街を指して行つてしまつ。

(ソング2)

偶然住むことになった
土地土地の風習に
苦もなく染まってゆく
露西亞人の風習

それにも似て
嘘のような柔軟性で
素直に順応し適合する
樺太人の風習

人々は気づかない
期せずして住むことになった
人々は気づかない
偶然に身を寄せるアイヌ人たち

役人も利権屋たちも

植民地拓殖政策も
新聞も政治も
東京にも 中央政府にも
なんの興味も湧かない

大切なのは
川をのぼってきたシャヤ
大切なのは
鳥たち 犬たち 山や森

人々は気づかない
期せずして住むことになった
人々は気づかない
偶然に身を寄せるアイヌ人たち

E(D・S時はセリフと語り)

樺太郎
「和人(シャモ)たち、シャモたち
おら社会民衆党さ入ったテ
アイヌ、アイヌて馬鹿にするな
アイヌも團結すれば強いテ
和人(シャモ)たち、シャモたち
おら社会民衆党さ入ったテ」

(こう歌った樺太郎が口笛を吹くと、十数匹の犬が飛び出す、その犬をひきつれて舞台上を歩き回る)

かれらはなんと走ることが
巧いのだろう
それは走っているのか
踊っているのか判らない、
樺太郎へ近づくと

主人の胸まで一気に駆け上がり眼やら鼻やらペロペロなめる。

三つの生物の親密
三つの生物の親密

(3面からつづく)

(ソング3)

岬の突端の細い路に現れた
 若い山林検査官
 雪の道を踏み外しながら歩く
 若い山林検査官
 撃った鳥を腰にぶら下げて
 かつて失った何ものかを
 樺太に探し求める
 若い山林検査官

「親父、いるか、
 権太郎おやじ、いるか」
 「誰だあ」
 「おれだよ」

「ああ、山林の旦那か、
 入れや、よく来たテ」

遠慮はするな づかつかあがれ
 遠慮はするな いつでもあがれ

ほんとのことをほんねで語るなら
 アイヌもシャモも関係ない
 アイヌもシャモも関係ない
 異民族なんてどうでもいい

遠慮はするな 修正するな
 遠慮はするな 修正するな

おれの息子はシャモ並みに
 無声映画でフッパ吹き
 おれも社民党に加わって
 まるでシャモのように出世

だがアイヌの仲間はず
 だがアイヌの仲間はず
 孤立し みな死に 熊も減り
 深い悲しみに暮れているしかない
 んだよ

遠慮はするな 修正するな
 遠慮はするな 修正するな

若い山林官もアイヌたちと
 一致するものをもっている
 それは意志の弱さのゆえに
 生活への冒険を
 求めてゆく心理である。

大都会を遠く離れた
 北国の生活では
 ここでは

良心的であればあるほど、
 村から離れて自然の中に
 隠れることができる。

だから、

若い山林官はアイヌたちの
 盗伐を見逃していた
 アイヌたちが
 生活の糧のために、
 おかみの所有地で
 盗みを働いても
 判らないように

山火事を起こしても、
 山林官は見えて見ぬふり。
 歴史は修正できてても、
 良心は修正できない。

(ソング4)

長いものに巻かれよう
 長いものに巻かれよう

みんな知ってる わかってる
 おても こころも
 泥棒するのは
 製材業者や 製紙業
 公然と泥棒していれば
 太く長く大きくなるのさ

長いものに巻かれよう
 長いものに巻かれよう

みんな知ってる わかってる
 狡猾 貪欲 金儲け

良心なんかボー捨てしとけ
 コソコソしないで 堂々と
 太く長く大きくなるのさ

長いものに巻かれよう
 長いものに巻かれよう

失うものなど
 なにもなかったかのように
 失うものなど
 どこにもなかったように
 長いものに巻かれよう

(ソング5)

狩も鉄砲も下手くそな
 若い山林検査官
 かつて失ったなにかを
 自然に探し求める
 若い山林検査官
 権太郎に心を寄せる
 若い山林検査官
 アイヌの属する大地に
 心を寄せる
 若い山林検査官

気づかないうちに樺太に
 極北の地にたどり着いた
 だが獣たちは
 アイヌを迎え入れた

北緯50度まで追い立てられた
 生活の敗北者の群れ
 だが獣たちは
 アイヌを迎え入れた

祈りを捧げよ
 無数の獣に 獣の骨に
 死の追憶 決して怠らない

自然を征服した気になって
 自然を忘れてしまったのは

いまも昔も日本人
 狩の仕方もままならず
 祈ることさえ忘れたのは
 いまも昔も日本人

大地はシャモに属していない
 アイヌは大地に属してる

祈りを捧げよ
 無数の獣に 獣の骨に
 死の追憶 決して怠らない

祈りを捧げよ
 無数の獣に 獣の骨に
 死の追憶 決して怠らない

(ソング6)

他人に不意に
 頬を打たれたみたいなの
 第一の雪崩
 村の埋没 小さな礫
 積み積もって
 権太郎ははたと気づく
 他人に不意に
 頬を打たれたみたいなの
 第二の雪崩
 権太郎の小屋を襲い
 犬が逃げ出し
 権太郎も飛び出した
 逃げ遅れた山林官に
 火の手が迫る
 屋根の梁に挟まれた
 身動きのとれぬ山林官
 獣のような権太郎
 第三の雪崩を予感
 直観的に鋸を手にして
 山林官の腕を切断する
 雪崩が襲ってきた
 他人に不意に
 頬を打たれたみたいなの

他人に不意に
 頬を打たれたみたいなの
 第二の雪崩
 権太郎の小屋を襲い
 犬が逃げ出し
 権太郎も飛び出した
 逃げ遅れた山林官に
 火の手が迫る
 屋根の梁に挟まれた
 身動きのとれぬ山林官
 獣のような権太郎
 第三の雪崩を予感
 直観的に鋸を手にして
 山林官の腕を切断する
 雪崩が襲ってきた
 他人に不意に
 頬を打たれたみたいなの

他人に不意に
 頬を打たれたみたいなの
 第二の雪崩
 権太郎の小屋を襲い
 犬が逃げ出し
 権太郎も飛び出した
 逃げ遅れた山林官に
 火の手が迫る
 屋根の梁に挟まれた
 身動きのとれぬ山林官
 獣のような権太郎
 第三の雪崩を予感
 直観的に鋸を手にして
 山林官の腕を切断する
 雪崩が襲ってきた
 他人に不意に
 頬を打たれたみたいなの

他人に不意に
 頬を打たれたみたいなの
 第二の雪崩
 権太郎の小屋を襲い
 犬が逃げ出し
 権太郎も飛び出した
 逃げ遅れた山林官に
 火の手が迫る
 屋根の梁に挟まれた
 身動きのとれぬ山林官
 獣のような権太郎
 第三の雪崩を予感
 直観的に鋸を手にして
 山林官の腕を切断する
 雪崩が襲ってきた
 他人に不意に
 頬を打たれたみたいなの

他人に不意に
 頬を打たれたみたいなの
 第二の雪崩
 権太郎の小屋を襲い
 犬が逃げ出し
 権太郎も飛び出した
 逃げ遅れた山林官に
 火の手が迫る
 屋根の梁に挟まれた
 身動きのとれぬ山林官
 獣のような権太郎
 第三の雪崩を予感
 直観的に鋸を手にして
 山林官の腕を切断する
 雪崩が襲ってきた
 他人に不意に
 頬を打たれたみたいなの

他人に不意に
 頬を打たれたみたいなの
 第二の雪崩
 権太郎の小屋を襲い
 犬が逃げ出し
 権太郎も飛び出した
 逃げ遅れた山林官に
 火の手が迫る
 屋根の梁に挟まれた
 身動きのとれぬ山林官
 獣のような権太郎
 第三の雪崩を予感
 直観的に鋸を手にして
 山林官の腕を切断する
 雪崩が襲ってきた
 他人に不意に
 頬を打たれたみたいなの

(ソング7)

自然の脅威なのか
 人間への復讐なのか
 神々の怒りだったのか
 偶然の出来事なのか
 分からない
 傷を負ったシャモ
 救い出したアイヌ
 医者に連れていくのに
 櫓を引く13頭の樺太犬
 ケンケンケン
 よく仕込まれた樺太犬
 櫓を引く13頭の樺太犬
 ケンケンケン
 それもまた
 自然の暴力の一部なのか
 いや アイヌの深い知恵なのか
 自然の脅威なのか わからない
 人間への復讐なのか わからない
 神々への怒りだったのか
 わからない
 偶然の出来事なのか わからない
 櫓は櫓は海つたいに飛んでく
 雪明りの路を櫓は飛んでく
 櫓は櫓は海つたいに飛んでく
 雪明りの路を櫓は飛んでく
 櫓は櫓は海つたいに飛んでく
 雪明りの路を櫓は飛んでく
 Ah



「スキヤキソング」に喝采

シャンソン酒場の一夜

秋田県支部 熊谷 均

2年前(2019年)の10月にフランス在住48年の同級生に誘われて、男4人で10日間、3800キロのドライブを楽しみました。8日目に、アコーディオンの生演奏で飲みたいという希望がかないました。その時の日記から…。

大衆バーで一杯飲んでから20時にパリ郊外の下町の酒場「懐かしのベルヴィル」という店に行く。『愛の讃歌』で知られた伝説のシャンソン歌手エディット・ピアフの大きな写真が飾ってある。

狭いテーブル席で仔牛のステーキと赤ワインで乾杯。シャンソンの生演奏目当てに来ている40人ほどで客席は満杯だ。

食後にアコーディオン弾きと中年女性歌手の2人が登場。ピアフの『バラ色の人生』や日本でも流行った曲など、客席を回りながらの息が合った演奏は気分よく3回もワインを追加してしまう。

皆で歌う時間には歌詞カードが配られて次々と演奏し、休憩後は各国の客に歌わせて伴奏する。

日本の順番だということで『上を向いて歩こう』を歌う。知らないらしく、伴奏なしになったが、4人で構わず歌うと喝采。酔った勢いで調子に乗ってフランスの童謡が原曲の『クラリネットをこわしちゃった』をハミングで歌うとアコーディオン伴奏が入り、途中から米、英、カナダ、オランダなどの客の大合唱になり驚いた。

最後には、皆引っ張りだされ、フロア満杯になりダンス。私は、イギリス高齢女性に誘われ千鳥足で汗だくになりステップを踏んだ。

終わり頃、アコーディオン弾きに、「さっき歌った歌は何か」と聞かれ、『スキヤキソング』といい、「日本人は皆知っている」と友人に通訳してもらった。最後の余韻を引きつつ、ホテルに帰るときは、夜更けて満天の星だった。

旅行から2年がたち、友人からはフランスでのコロナまん延の話、隣人が病院に行ったままだとか、娘が感染したが軽いなどと電話が時々来ます。今、本当に幸運で楽しい旅だったと懐かしく思い出します。

(NTT 労組新聞 2021/10/23号から転載)



工夫しながら活動をつづけた仲間に学ぼう



充実した都支部交流会

12月12日(日)、北区滝野川会館小ホールにて都支部交流会を開催した。長い緊急事態宣言の中、練習場所にも事欠いて活動ができないグループが多かった。そんな中でも精力的に、あるいは地道に工夫しながら活動を続けていた仲間がいる。今回はそんな3団体の発表を柱に、会員の交流に重きをおいた。

発表は『おだかすや』『メイウィンズ』『ういみん』の3団体。『おだかすや』はひとり芝居を中心に毎月公演を続けている。学びの場を求め、コンクール等にも挑戦しているという。『メイウィンズ』はコロナ禍で練習場所の確保が難しい中、メンバーのスケジュールも考え時間や曜日をこまめに調整してきた。発表は5曲。そのうち4曲は無伴奏で得意のハーモニーを聞かせた。『ういみん』は練習ができない中でも連絡をとりあい続けてきた。11月から練習を再開し、今回ピアノ伴奏のメンバーも増え3曲を歌った。

第二部は交流会。松本会長に挨拶をいただき、感想と近況報告でじっくり2時間。総会が書面決議で、会員で顔を合わせる機会がなかったので貴重な交流となった。参加者は15名と少なかったが、充実した会でした。(森理子)

12月20日、秋田県支部は支部加盟労組及び個人会員の出席の下で2021年度定期総会を開きました。冒頭村岡会長から「コロナ禍で制限がある中で、創意と工夫をもって活動されていることに敬意を表します。県支部は昨年度に引き続き活動ができなくて申し訳ない。コロナ禍3年目に入るが、音楽運動を前進させるための方針を提起するので討論で豊富化をお願いします。」と挨拶がありました。

はたらくものの音楽祭 in Akita、はたらくものの音楽祭、平和の夕べ、食とみどり・水のフェスティバル、東北北合宿、創作活動〔創作塾(仮称)]を行うことなどを確認して総会を終えました。

役員体制は、村岡会長(留任)、副会長は林野労組・秋教組・自治労・NTT 労組、活動家枠で桜庭(留任)・後藤(留任)・佐藤(前事務局長)、事務局長に下総大(新任)、事務局次長に木下知久(新任)、事務局員に大嶋・熊谷・沓澤・阿部、幹事に労金労組・東北機械労組・運輸労連・全農林・全水道となりました。(後藤)

県支部総会

新しく事務局長に就任した下総大です。よろしく。



歌の力が物語るもの 102

菜萁坂つた行動 12/10 (433回) 報告 Ricco

【参加者】モリヤさん イサさん はしゆきさん スーさん 経産省からの男性 達哉 森 計7名

先週の日曜日は、辺野古埋め立て設計変更に対し沖縄県知事が不承認を表明したことへの支援集会だった。官邸前で行われた集会は参加者500名との発表だったが、もっといたのではないかと思われるほど、歩道を埋める人波が長く続いていた。菜萁坂のメンバーも集中し、集会後は国会議事堂前駅に向かう参加者に向けて『沖縄今こそ立ち上がろう』をエピソードで歌い続けた。歌に呼応してこぶしを上げる参加者も多く、「不承認表明の後の『今こそ

立ち上がろう』は更に高揚するね」「見送りだけじゃなくて、集会の中でも歌えはいいの」との声もかけられた。

さて、今週。いつものようにひとしきり歌ったあと、ぜひギターと合わせて歌いたかった『平和に生きる権利』をリクエスト。嬉々として弾き始めたが、二人して伴奏ができなくて断念。次までに練習して来ようね」と宿題とした。「誰の曲?」と質問がでて「ビクトル・ハラだよ、ほら、チリの」と会話しているうちに、突然歌いたくなる『ベンゼレモス』。菜萁坂で『ベンゼレモス』を歌うのは初めてではないだろうか。

『私たちの暮らしは私たちが決める』『明日を殺すな』『民衆のうた』と、みんなが知っている歌をさがしながら歌い続ける。「私たちが許さない」「練習してきたよ」とモリヤさん。では、原発パージョンで。経産省前から一緒にきたという男性は、歌には参加せず私たちに向き合う形で座り込み、歌が終わるたびに拍手をくれた。彼の前には手書きの主張文が置かれている。「道に倒れる人を助けられないなら、あなたを助ける人もいないOK? 世界が嘲笑する日本人の世界観、可愛い子には旅をさせろ 井の中の蛙? 一人旅バックパッカー」。歩道の電灯が薄暗くて、歌詞カードが見えないね」と言っていたら、彼が旗竿にライトをテープで縛り付けてくれた。すごく明るいLED懐中電灯。ありがとう。

「沖縄をうたおう」ということで『沖縄今こそ立ち上がる』と『ジュンゴンのすむ海』『ふるさと沖縄』『月桃』と、続けて歌った。設計変更は不承認だ。防衛局は不服請求を出すらしい。市民のための法律を、市民を押しさえつけるために、市民(私人)のふりして利用する。怒りしかない。



12.17 原発いらぬ金曜行動お見送り

水道橋より

▼「音楽運動」は編集ソフトを使わず(互換性を持って継続したいので)WORDで作成していましたが、1月号編集集中突如言うことを聞かなくなりました。シロウトなりに調べてみたら、一部バージョンが古いということなので最新?バージョンに変換してみました。▼作業はできるようになったのですが、今度は「ワードアート」などが思うように動かない。題字や見出しなどの字体の拡大・縮小がうまく収まらない。ウーン、難儀。スキルアップに努めます。(佐藤)

▼おだかずさんからメールです。▼先日、都支部交流会が行われました。コロナであまり活動できている団体がないわけですが、その中でも積極的に活動を続けているサークルということでメイウィンズやういみんと共にスポットを当ていただきました。▼自分の演目は「赤いランドセル」。悲しくて、でも最後はほっこりできる作品ですが、それでいて中身はしっかり日音協です。▼この作品ですが、実は別現場で撮ったビデオを販売中です。一度チケットを買っていただくと、年内いっぱい(2021年ですが)、いつでも、何度でも視聴できます。1000円です。日頃、おだがどういう活動をやっているか、よろしければぜひ見届けてください。

どん行

(150)

飯島貞親

らば、環境問題、自然破壊問題に本格的に取り組まなければならぬ。人命より経済を優先させる資本主義とオサラバして。

▼昨年は、新型コロナに振り回された一年だった。今年もまだ第6波の懸念が強く残っている。多くの人が元の世界に戻りたいと願っているが、元に戻ってもまた別のウイルスが悪さをする可能性は消えない。▼多くの研究者が指摘するように、新型コロナウイルスの蔓延は、環境破壊が起因していると見て間違いのないだろう。グローバル資本主義による農業関連産業が、世界中の森林を伐採し農地を拡大させてきた。農地の拡大は、大量の餌を必要とする畜産業とも連動している。その結果、これまで接触する機会がなかった野生動物と人間が接近した。野生動物が激減する中で住処を失ったウイルスは人間という格好の居場所を見つけた。